

団塊が老いる時

オピニオン

戦後日本を長年支えてきた団塊の世代が75歳を迎え、医療や介護に支えられる立場に回る「2025年問題」。東京五輪から5年後、「超高齢社会ニッポン」はどうなるのか。

自宅で死迎える選択肢を



49年東京生まれ。内科医。千葉県松戸市の病院で高齢者向けの医療や福祉に携わる。千葉大付属病院では、千葉県と連携して高齢社会の医療政策を研究している。

高林 克日己さん

千葉大付属病院副病院長

日本の高齢化は今後、人類史上例がない速度で急激に進みます。特に都会で高齢者が爆発的に増えますが、実際のどのような世界になるか、今まで十分に明らかになってきませんでした。

院でできる病院が大幅に不足します。増える需要にこたえようとしても問題は解決しません。今の延長線上に解はないのです。

団塊世代が75歳以上の後期高齢者になる2025年の医療の需要は、10年の1.3倍前後に増えます。75歳以上の医療費は若い人の約8倍かかっています。

院にいたことが幸せなのでしようか。苦しいのは病院でも自宅でも同じこと。在宅患者を支える態勢を整えれば、本人は自宅で最期まで自由にテレビを見られるし、酒やたばこも楽しめる。高齢者に「人生の最期をどこで迎えたいか」と聞けば、大半は自宅と答えます。在宅死は冷たい扱いどころか、満足できる死に方になれるのです。

現実には、これらを賄う財源はないだろうし、人員も絶対的に足りません。

高齢化で医療を必要とする人が増えれば、本人の意向と関係なく、あぶれた人は病院には入れません。病院の外で死を迎えるという結果は同じかもしれないが、自分で死に方を決められるかどうかという点で、決定的な違いがあります。

問題がまず表面化するのには救急の現場です。救急患者の半数は65歳以上で、パンクするのは確実です。東京を中心とする50

問題がまず表面化するのには救急の現場です。救急患者の半数は65歳以上で、パンクするのは確実です。東京を中心とする50

問題がまず表面化するのには救急の現場です。救急患者の半数は65歳以上で、パンクするのは確実です。東京を中心とする50

問題がまず表面化するのには救急の現場です。救急患者の半数は65歳以上で、パンクするのは確実です。東京を中心とする50

的な違いがあります。

国にお金がなくなれば、医療費の自己負担が大幅に引き上げられるかもしれません。国が上から決める「年寄りの切り捨て」は最悪の選択でしょう。そうしないために、高齢者の延命治療に関する自己決定権を重視し、医療者とともに「尊厳ある死」を目指すことが、医療の需要そのものの歯止めにもなります。

延命治療を望まない方、最期を自宅で迎えたい方には、事前指示書を書くことを勧めます。本人の意思が明確なら、医者は無理な医療をしません。安らかな最期を望むときに救急車で運ばれて過剰な治療を受けることもありません。

高齢者が死に場所を失う「終末期難民」という言葉がささやかれています。在宅の高齢者を支える医師や看護師を増やし、高齢者同士もコミュニティを作って支え合うことにより、終末期に備えることが重要です。

団塊世代が後期高齢者になる25年前後に、日本の高齢化の大きな波が一気に押し寄せます。その直前になって準備をしたのでは間に合いません。20年までが勝負です。眼前に迫った高齢化の大波を乗り越えるうえで、今がまさに重要な局面なのです。

介護の負担、倫理を溶かす



76年東京生まれ。作家。「ロスト・ケア」で2012年の日本ミステリー文学大賞新人賞を受賞。児童向けの小説やコミックのシナリオも手がける。

葉真中 顕さん

「ロスト・ケア」を書いたミステリー作家

昨年、厳しい介護の現場を舞台にしたミステリー小説「ロスト・ケア」を出版しました。執筆のきっかけは私自身の家族の介護です。その頃、介護報酬を不正請求した「コムスン事件」も起きました。介護大手のコムスンのサービスを我が家も使っていたので、高齢社会の構造問題が顕在化したと思いました。

「ロスト・ケア」を舞台にしたミステリー小説「ロスト・ケア」を出版しました。執筆のきっかけは私自身の家族の介護です。その頃、介護報酬を不正請求した「コムスン事件」も起きました。介護大手のコムスンのサービスを我が家も使っていたので、高齢社会の構造問題が顕在化したと思いました。

小説には、認知症の親の介護を「地獄だ」と嘆くシングルマザーやフリーターの若者が出てきます。いずれも、介護の経験者や介護職に取材したもので、現実に行き詰っていることです。

「70歳以上安楽死法案」なんてものは絶対にあり得ないと考えます。しかし、将来的に社会全体が限界状況に陥れば、「やむを得ない」と許容され、それに近い政策が実行されることも、十分ありうると思います。

制度もリソースも追いついていません。そのしわ寄せが一番重たいのは、家族です。あまりに重たい介護負担を背負うと、家族の善意がすり切れ、「死んでくれた方がましだ」と思ってしま

「やむを得ない」「次善の策だ」と思い始めたら、もう止められません。もっと手前の段階で、社会制度や考え方を考える

必要があります。

人間は弱く、状況に流される存在です。高齢化の最も安易な解決策は、高齢者がいなくなることでしよう。そうすれば、高齢者の既得権を奪う改革は必要ないし、為政者にも都合が良い。だからこそ、この問題は人間の倫理観を溶かす危うさをはらんでいるのだと思います。

10年後、20年後、より深刻になってゆく高齢化を、いかに倫理観を溶かさずに乗り越えるかが課題です。だが、それを良心に期待してはいけません。

最大の課題は、生産年齢人口が増えることを前提につくられた社会制度が、時代に合わなくなっていることです。「人々が良心を持って支え合えば、高齢化は乗り越えられる」といった奇麗事に頼って制度の改革を怠れば、高齢化で生じる様々な負担が個人に押し付けられ、地獄のような状況が生まれるでしょう。

既得権に関わる年金や医療の改革で合意を得るのは難しい。でも、その困難を避け続けられれば、私たちは「家族のために」といった美辞麗句の名の下に、もっとひどい世の中をつくってしまうかもしれません。(聞き手はいずれも石松恒)